



Data

監督・脚本：広瀬奈々子

出演：柳楽優弥／小林薫／YOUNG DAIS／鈴木常吉／堀内敬子／芹川藍／高木美嘉／清水葉月／竹井亮介／飯田芳／岩崎う大

■■■ショートコメント■■■

◆本作の監督は、是枝裕和、西川美和の愛弟子である広瀬奈々子。彼女は是枝監督の『そして父になる』(13年)、『シネマ31』39頁)、『海街diary』(15年)、『シネマ35』未掲載)、『海よりもまだ深く』(16年)、『シネマ38』250頁)、そして西川監督の『永い言い訳』(16年)、『シネマ38』94頁)に助監督として参加してきた、1987年生まれの期待株。そして、自ら苦勞して書いた脚本で監督デビューしたのが、本作だ。

本作で本名を明かせないある秘密を抱えた主人公シンイチを演じるのは柳楽優弥。他方、8年前にある事情で妻と息子を失った木工所のオーナー、涌井哲郎を演じるのが、ベテラン俳優小林薫だ。すると、本作のテーマは、家族、喪失、絆、再生、そしてタイトルの“夜明け”。そう考えると、こりゃ“期待大!” そう思ったが・・・。

◆本作は、川辺で倒れているシンイチを哲郎が発見し、家に連れて帰るところからスタートする。シンイチの中に、死んだ息子の面影を感じ取ったらしい哲郎は、以降、一方では従業員のように、一方では息子のようにシンイチに接し始めたが、そもそもその流れがいかに不自然だから、私にはアレレ・・・。また、木工所の事務員の成田宏美(堀内敬子)と哲郎は近々結婚式を挙げるそうだから、それもアレレ・・・。さらに、ベテラン従業員の米山源太(鈴木常吉)も、若手従業員の庄司大介(YOUNG DAIS)も、しきりにシンイチを仲間のように接しようとしているが、これもアレレ・・・。

◆2011年3月11日の東日本大震災の直後に社会人となった世代である広瀬監督は、本作で人間の「弱さ」を見つめ、社会で挫折した人間が逃げずに自分と向かい合うまでの道のりを描きたかったようだ。しかし、本作に見る、弱さのさらけ出し合い、なめ合いのような姿をみていると私はウンザリ。そもそも、運転免許証も住民票も持たない幽霊のような若者を、今の日本社会でどうやって雇用するの? しかも、哲郎はシンイチとわが子のように接しているから、養子縁組の話までいくのかと思うと、それはなしだからアレレ。

この手のカッコだけの問題提起型脚本は、私にはノーサンキューだ。

◆将棋や囲碁の世界、またスポーツや芸能の世界での一部の若手有望株は別だが、今ドキの若者は状況を読めず、状況対応能力に欠けるヤツが多い。また、“パワハラ批判”がある一方、ろくな仕事もできないくせに、「これは僕に向けた仕事ではありません」などとぼざいて放り出す若者も多い。そんな世相を嘆いている私には、広瀬監督の描く、シンイチやその他の若者たちへの不満が強くある。哲郎と宏美の結婚式が最悪の事態になったのは、その席でシンイチをわが子のように紹介し、無理矢理彼にマイクを向けた哲郎の責任が大だが、そこで「僕の名前はシンイチではありません。」と告白するシンイチの状況対応力のなさには唾然!こりゃ、一体どうなってるの？

◆“父と子の絆”と言えば、11月23日に「生誕百年 追悼橋本忍映画祭」で観た『砂の器』(74年)における巡礼の旅の“父子の絆”は涙、涙の物語だった。同作では、一言のセリフもない子供役の表情だけの演技が強く印象に残ったが、本作ではシンイチが哲郎の元を去っていったのはある意味当然。そこで私の興味は、その後シンイチはどこへ行くの？だったが、さて広瀬監督はそれを本作でどう描くの？

11月17日に観た『アンナカレーニナ ヴロンスキーの物語』(17年)は、アンナが鉄道自殺した後の、アンナの恋人だったヴロンスキーとアンナの一人息子セルゲイとの対決を描いていたが、それによるとヴロンスキーにもアンナの自殺は謎だったらしい。しかし、本作ラストにはいかにも飛び込み自殺するのにぴったりの海の風景が登場し、さらにシンイチが往来する踏切の前で立ち止まる姿も登場する。すると、そこでシンイチはどうするの？ひょっとして、シンイチもアンナのように・・・?いやいや・・・?

2018(平成30)年11月30日記